

駅から ぶらり旅

文＝伊藤哲也
写真＝亀井川 英樹

春

はたくさんの青とともに、南からやってくる。海原にうねる群青、天空のわすれな草色、水平線の甕覗き（※）。風までわずかに青いようだ。函館駅から駅レンタカーで南茅部に向かった。遠回りになるが、戸井、恵山を経由するルートで、津軽海峡（春景色！）と太平洋の潮の香りを呼吸した。



復元された住居内部。屋根の茅の保存性を高めるため、定期的に火をたいて煙を上げている。柱は栗の木で組んだ。

●史跡大船遺跡／函館市大船町575-1 ☎0138・25・2030（函館市縄文文化交流センター）。9:00～17:00（11月～3月は9:00～16:00）、年末年始休。管理棟（展示室）の入館、ガイドとも無料。



函館駅

◎第二〇九回

青と白のコントラストが鮮やかな「縄文のにわ」。縄文人も、この景色を見ていた。



発掘当時のジオラマの前で、大宮さんに話を伺った。周囲の森の中を含めると、120軒近い住居跡が見つかった。これは約1500年間の数であり、数家族・数十人規模の集落だったと思われる。

史跡大船遺跡は海を望む高台にある。近くを大船川が流れ、海・川・山の幸に恵まれた好立地。五千五百年前から四千年前の約千五百年間という、長期にわたる縄文中期の大規模集落だ。周囲には栗の木が茂り、鹿を追い落とす罾の穴の遺構も見つかっている。栗はもともと北海道には自然分布していた

管理棟には発掘の経過や出土品などについて、解説パネルがある。ガイドの一人・大宮トシ子さんは、十七年ほど発掘作業に携わり、ある時、鹿の骨で作った縫い針を発見した。「三分割され、一直線に並べてありました。針供養のような、感謝の思いを感じました」。大宮さんはかつて洋裁をしていた。針

かっただと考えられ、本州から持ち込まれたのだろう。
史跡は「縄文のにわ」として整備され、完全復元・骨組復元など復元住居が展示されている。竪穴が二層以上も掘り込まれ、他の地域より深いことが特徴だ。



（※）甕覗きはごく薄い青で、「藍甕に布をちょっと湿して染めた色」、または「白い甕に水を張り、覗いた時に見える水色」が、その名の由来とされる。

記事の内容、表示金額は取材日（2024年2月8・9日）時点のものです。予告なく営業時間の変更や休業、商品の販売中止などの場合があります。ご利用の際は予めご確認ください。表記の金額は全て税込みです。

仕事を愛する感性が、数千年を経て通じ合ったのだろう。

今夜の宿は大船川のほとりに建つ「ホテル函館ひろ

め荘」。十三年前、やはり小誌の取材で宿泊して以来だ。当時の総支配人・西村晴美さんが社長、スタッフの二本柳渉さんが支配人として、いま采配を振るっている。うれしいことに、西村社長が当時の小誌の記事を見せてくれた。

もう一人の支配人・杉林洋子さんは、「今も変わらず、地元と一緒に歩む宿です」とにつこ

乳白色の硫黄泉（1階大浴場）が、空の色を映して青みがかった見える。含硫黄・ナトリウム・塩化物温泉。



ひろめ荘の客室。洋室（ツイン）2、和洋室2、和室18の計22室。和室も半分はベッドがあり、ベッド希望の場合は予約の際に伝えるといい。



重曹泉の露天（2階大浴場）では、山のいで湯の気分が満喫できる。泉質はナトリウム・塩化物・炭酸水素塩泉。

り。スタッフの皆さんの対応も爽やかで、ゲストとの会話が弾んでいる。

宿の魅力の一つは、二種類の温泉。西村社長が「地元の宝です」と言う硫黄泉は自然湧出しており、源泉そのまま。ほのかな硫黄の香りも心地よく、仰げば春の優しい青空がある。

無色透明、軽やかな肌触りの重曹泉は、体をゆるりと甘やかしてくれる滑らかさだ。一帯では少し掘ると



天ぷらはカニ脚、キス、野菜類をさっくりと揚げた。原料の一部に葉を使った発泡酒「縄文。MINORI」は、すっきり爽やかで香り豊かな。

夕食の造り。この日はカレイ、ハマチ、マグロ、甘海老、サーモンの5点盛り。日本酒は函館にある醸造元の「五稜」。純米吟醸や特別純米などが味わえる。



湯が湧くといい、縄文人も温泉を楽しんだのではあるまいか。

夕食は「海の幸満喫プラン」を堪能した。前菜、小鉢、造りに始まり、焼き物、煮物、天ぷら、海鮮鍋と、温泉宿の正統派である。味付けはどれも穏やかで、バランスがいい。ご飯は目の前で釜炊きされている。メニューは月替わりで、四月はサクラマスやフノリが期待できる。

山あいの一軒宿なので、夜の静寂は深い。懐かしさとともに、春の夜の眠りに身をゆだねた。

翌朝は、垣の島遺跡に隣接する函館市縄文文化交流センターへ。



海鮮鍋はあっさりした味付けながら、野菜の甘みがたっぷり。

世界文化遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する遺跡をはじめ、道南の遺跡から出土した土器や石器、骨角器などが展示されている。漁労や狩猟、交流など縄文人の暮らしが、改めて実感できる。

た とえば紅色鮮やかな漆塗り注口土器。下地に黒漆を塗

った上に、朱漆を重ね塗りしている東北に多く出土しており、そこから持ち込まれたのかもしれない。学芸員の前田正憲まへだ まさのりさんは、「この土器とは別に、約九千年前と見られ



学芸員の前田さん(右)と、漁具の展示の前で。縄文人は漁網や釣りなどで、サケ・マス・カレイなど豊富な魚を獲り、食していた。



国宝の土偶。高さ41.5cm、中空土偶としては国内最大である。土偶の多くは女性を表しているが、これは女性的なフォルムと眉やひげなど男性的な特徴が共存している。男女の性を融合(あるいは超越)した、豊かな姿を表現したのかもしれない。

る漆製品も垣の島遺跡で見つかり、世界最古ではないかと言われている」と言う。漆の伝統は、かくも深いのである。

足形付土版は、亡くなった子どもをの足を粘土板に押し付けて、写し取ったもの。親がこの世を去った時、一緒に埋葬されたらしい。この世で別れた子と、あの世での再会を願ったのだろうか。

見事な造形と繊細な文様の中、土偶(函館市著保内野遺跡出土、愛称「カックウ」)は、厳かにライトアップされている。墓の近くで見つかったことから、やはり埋葬にかかわるものと見られている。

本格的な農耕なしに定住生活を実現し、同時に広く交流もしていた縄文の人々。彼らは心の内側にも外側にも、広大な世界を持っていたように思われた。



駒ヶ岳にも春が近づいていた(撮影は2月上旬)。

◎土偶の顔づくりを体験

交流センターではミニチュア土器づくり、縄文編みなど体験学習ができる。「カックウ」の顔づくり体験では、粘土を顔の形にしたあと、目鼻などを付ける。学芸技術員の横野忍(よこのしのぶ)さんの丁寧な指導のおかげで、1時間かけて完成。作品は持ち帰り、オーブンで焼いて焼成する。



1.土台に目鼻を線で刻み、ひも状の粘土を張り付けてゆく。集中力が試される。2.完成した作品。「宇宙人のおっさん?」との声もあるが、私の心のなかの縄文人は宇宙的な大きさなのだ。

●函館市縄文文化交流センター／函館市臼尻町551-1 ☎0138-25-2030。9:00～17:00(11月～3月は16:30まで)。休館日は月曜日(休日の場合は開館し、最も近い平日)・毎月最終金曜日・年末年始。大人300円。体験学習は当日も受け付けるが、人数が多い場合は要予約。カックウの顔づくり(約45分間)150円、縄文編み(初級約30分、250円)。道の駅を併設。